

桜田プランにおける教育課程編成の展開
— 映画「こどもグラフ」での新聞部の活動の分析を中心に —
佐藤知条¹⁾

A Study on The Development of “Sakurada Plan (Educational Plan in Sakurada Elementary School)” ; Focusing on the activities of Newspaper Club in 1949
SATO Chihiro

Abstract

From the latter half of the 1940s to the first half of the 1950s, In Sakurada Elementary School, it had been researched practically the way of education based on the empiricism. The plans created based on this attempt were widely known as “Sakurada Plan” , and it has been positioned as one of the signature efforts in the curriculum remodeling movement in Japan.

In this paper, by analyzing the movie “Kodomo Graph” that introduces the activities of the newspaper club in Sakurada elementary school, it is found that the newspaper club members brought their experiences in social studies across the grades. And it is also found that the newspaper club functioned as a place to explore the two directions of social studies learning in a multilayered way.

Keywords : social studies, core-curriculum, newspaper club, course of children’s daily life, extracurricular activities

はじめに：問題の所在

戦後日本の学校教育の再出発にあたり、1947年3月に「学習指導要領一般編（試案）」が刊行された。そこでは、国家主義的な価値観にもとづいて知識注入型で行われた戦前・戦中の教育の反省に立ち、子どもの生活経験のなかから学習の題材を得、活動を通して問題解決的に学ぶ経験主義の考え方を基調とした教育の方向性が示された¹⁾。あわせて、国家が一元的に教育内容を決めて各地域・学校・教師に統制するのではなく、地域の実情に応じてそれぞれの学校・教師の創意工夫を生かすべきだという考え方が提示された²⁾。そして、全国各地の学校で経験主義の考え方にもとづいた独自の教育活動の編成方法や教育方法のあり方の研究と計画が行われ、実施されて、その過程や成果が公表されていった。

このなかで、民主主義社会の担い手を育てることを重要な目的として新たに設置された教科「社会科」を中心に据えて活動を集中させ、活動に必要な要素を他の教科で学び関連づけるという形で総合的な教育課程の編成を模索する動きが一つの潮流となった。コア・カリキュラム運動と呼ばれるこうした動きの代表的な実践研究校の一つに東京都港区の桜田小学校があった。同校は学習指導要領の刊行より前から社会科の研究に実践的に取り組み、1947年1月には社会科としては日本初とされる公開授業を行ったり、実践にもとづいた授業論や教育課程の編成論を出版したりするなど、戦後教育の展開において広く影響を与えた³⁾。現在の教育学および教育史の研究領域においても、同校の取り組みの過程および成果—すなわち「桜田プラン」—はコア・

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

1) School of Management, Shizuoka Sangyo University
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

カリキュラム運動の代表的なものの一つとして位置づけられている⁴⁾。

一方、桜田プランを含めたコア・カリキュラム運動には、活動自体が目的になってしまうくらいがあったことなど、さまざまな点から批判も生じた⁵⁾。そのなかから生まれた「はいまわる経験主義」⁶⁾という言い回しは今もなお教育や研究の世界に根強く残っているとされ⁷⁾、戦後初期の諸実践に対する理解や評価をさまたげてきたとも指摘される。

このような傾向に対し、北海道における戦後初期の社会科教育の取り組みを検討した木全(1984)は、「従来、教育史や社会科教育史で不当に低く評価してきた教育課程(カリキュラム)改革に注目しなければならない」(丸カッコ内原文)⁸⁾と主張し、そのためには地域における具体的な実践の資料の収集と分析にもとづく研究が必要だと指摘した⁹⁾。近年では、コア・カリキュラム運動のもとで各地の学校が独自に作成した学習指導案を集めた金馬・安井(2018)が、コア・カリキュラム運動への批判は思想面か方法面に偏っていて、「カリキュラムの全体構造や地域社会との連携こそ課題としていた事実を、見逃していたか軽視したものであった。先行研究や解説書のほとんども、それらの批判を肯定的に紹介してきた」と断じ、「こうした認識は内在的なものではなく、先行研究のみにより、せいぜい書籍や雑誌のみを史資料としてきた点に限界をもっているのではないか」¹⁰⁾との見解を示している。

当時の様子を具体的に知りうる新史料の分析がコア・カリキュラム運動の諸実践を新たな視点から見直す手がかりになることを示唆する先行研究もある。寺本(2011)は、桜田小学校の所在地である港区で1953年に発行された社会科副読本『わたくしたちの港区』を新たな史料として取り上げて内容を分析した。そして、同書の編集主任が桜田小学校の実践的な教育課程編成の取り組みを主導した教師の一人だった樋口澄雄であることをふまえ、①副読本は樋口らのボランタリーな努力によって作成されていること、②地域の社会事象を学習の題材にしたいという意図が強く

あらわれていること、③桜田小学校の近隣の地理に関する記述が厚いことから桜田小学校の取り組みを通した樋口の経験知が反映されている可能性があること、の3点を特徴として見いだした¹¹⁾。これらは、桜田小学校での取り組みを背景として地域社会と連携した学習を展開すべく副読本が作成された可能性を示すものであり、桜田プランの展開を理解するための新たな知見ということができる。

このように、従来とは異なる史料を用いることが桜田プランおよびコア・カリキュラム運動を新たな視点から理解し、現代的意義を明らかにするための手がかりになるという考えのもと、本稿では映画に描き出された桜田小学校の実践の様子を分析して知見を得ることを目指す。

1. 史料の概要

1.1. 映画「こどもグラフ」について

本稿で主たる史料として取り上げるのは、1949年に制作・公開された映画「こどもグラフ」である。これは1949年から翌年にかけて株式会社日本映画社¹²⁾が制作したもので、第8号まで存在する。「学校だより」と題して各地の小学校の様子を紹介した数分間の映像を中心に、時事的な話題〔たとえば、「湯川博士にノーベル賞」(第2号)〕や子どもの興味関心をひく話題〔「どうぶつニュース」(第7号)など〕が組み合わさって一つの号が構成されている。

桜田小学校の様子が描かれたのは第2号の「学校だより」で、副題を「ぼくらのしんぶん」とした約2分の映像である。

1.2. 「ぼくらのしんぶん」の内容

「ぼくらのしんぶん」では桜田小学校の新聞部の活動が取り上げられている。内容を表1にまとめた。約2分の映像は、新聞部の紹介(00' 00～00' 45")、交通博物館で取材を行う(00' 45"～01' 40")、取材をもとに新聞を作成して学内で配布する(01' 40"～02' 07")という3つの場面で成り立っている¹³⁾。

なお、映画では冒頭に「とうきょう 桜田

時間	画面	ナレーション
00'00"	学校だより ぼくらのしんぶん とうきょう桜田小学校 ＊これらの文字が字幕として画面上にあらわれる。	
00'06" 00'11"	校舎の外観 校庭で遊ぶ子どもたちから、校舎前の壁に新聞記事を書く子どもたち	学校だより。今月は東京の桜田小学校です。ここのお友達は学校新聞をたいへん熱心で作っています。
00'21"	掲示新聞の記事	黒板新聞。
00'25"	教室の天井に渡された「桜田新聞社」の三角旗	
00'28"	大きな机を囲み、話し合う 15 人程度の子どもたち	ここは、学校新聞の編集部です。
00'33" 00'38"	「投書箱」と書かれた箱をあけると、中から 20 枚程度の投書が出てくる 投書の内容に目を通す子どもたち	この桜田新聞社の社長は 6 年生のシモダくんで、社員は 20 人ぐらいいます。
00'45" 00'50"	交通博物館の中庭に集まる人々 人々のなかに 3 人の子どもの後ろ姿	3 人の新聞記者は、きょう、新聞記事を書くために交通額物館へでかけました。
00'54" 00'57"	取材する子どもの横顔からメモをとる手元へ しゃがんで機関車の車輪部分を見る子どもたち	模型の電気機関車のことを、実際に調べて書くのです。
01'01"	交通博物館の職員にインタビューを行い、メモをとる 3 人	子ども「今後のこの電車の計画を話して…」 職員「今後はね、この電車は子どもさんの電車だから、運転士も、車掌も、場内整理も、みんな子どもさんがたにやってもらいます」 子ども「子どもの電車っていうわけでは…」 職員「子どもの電車」 子ども「で、名前はまだわからないですか」 職員「名前はね、あなたがたにつけてもらうつもりでいます」
01'24"	子どもたち、機関車に乗る	
01'40" 01'43"	教室内で記事を書く子どもたち 黒板を使って記事の割りつけを考える	新聞記事の準備ができたので、どの記事をどこへ入れるか相談しています。
01'51"	印刷される新聞	さあ、いよいよ印刷がはじまりました。
01'56"	刷り上がった新聞の 1 面	
02'01" 02'07"	できあがった新聞を校庭で配布する。	できあがった新聞は、たちまちみんなでとりあいです。

表1 「ぼくらのしんぶん」の構成（表中の太字は本稿で映像を引用した部分である）

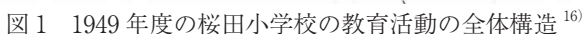
新聞部の位置づけ

映像の内容を検討する前に、桜田小学校における新聞部の位置づけを整理したい。1946年以来の同校の取り組みをまとめ、校長の古川正義と教師の室井光義の共著で1949年10月に出版された『桜田カリキュラム』¹⁵⁾によれば、新聞部は1949年度に新しく作られた

同書に掲載された1949年度の教育活動の全体構造(図1)を見ると、1949年度には「生活指導」内の「奉仕活動」の一部に「新聞部」が位置づけられている。このことについて校長の古川はつぎのように述べている。

「私たち三年半の精進は、どうやら学習指導の面は、軌道に乗り自信が持てるようになった。〔…〕しかし、公民的な資質としての、自分の属する社会の進歩発展に貢献する修練が未だ不十分である。そこで本年度（二四年）は、彼等の属する社会へ協力しよう、奉仕しよう、という実践的な行動を培おうと意図して、先ず奉仕活動のカリキュラムを構成して実施し出した」（丸カッコ内原文。また、〔…〕は引用者による中略。以下同じ）¹⁷⁾。

そのため、桜田小学校のそれまでの活動の蓄積をふまえつつ、社会の中で行動する力を育成する活動を行うために設けられた組織の



一つが新聞部だということができる。

活動内容についての具体的な記述もあるので、引用しながらまとめておきたい。新聞部を含めた7つの部には、「四年以上の子供を適性と希望に応じて所属させ、二、三名の教師が補導に当たっている」。一つの部は「平均三、四十人程度」の人数である。そして、新聞部では「印刷新聞・壁新聞・掲示新聞の三種」の新聞を作成している。これらの新聞は「何れも動きのあるもので、各自の生活や、家庭・社会の動向にふれた興味をもって読まれるものである」¹⁸⁾。これが新聞部の概要である。

3. 桜田プランの展開をふまえた映像の分析

3.1. 社会科の学習の発展的継承

前章で整理した新聞部の位置づけと活動の内容をふまえて映画の映像を分析し、部の活動の意義を検討したい。

図2に示したのは、交通博物館での取材をもとに教室で記事を書いているシーンである。机の上に、執筆の参考にしておりと思しき資料があることがわかる。拡大してみると、「社会科タイムズ」という文字が読める。ここから、社会科の学習での学びの成果を新聞部の活動に応用している可能性を見て取ることができる。

桜田小学校では1948年度および1949年度の6年生の社会科で新聞を主題とした学習が行われた。『桜田カリキュラム』によれば、1948年度の6年生の社会科には45～55時間扱いの「新聞」という単元が設けられていた¹⁹⁾、1949年度の6年生の社会科にも「新聞とラジオ」の単元が設定されていた²⁰⁾。そして、これらの学習のなかでは教室の壁などに貼り出す壁新聞作りや印刷による新聞の発行といった活動がなされていた。そのため、「社会科タイムズ」は、その名称も示唆しているように社会科での新聞の学習における成果物の一つと考えられ、それを参照しながら新聞部の活動が進められていたと解釈することができる。

ところで、社会科での新聞の学習では子どもたちから課題が指摘されていた。桜田小学校を著者として出版された『新しいカリキュ



図2 (上) 記事を書く子どもたち
(下) 机上の「社会科タイムズ」(拡大)

ラムの実践』(1949年)には、自分たちの新聞の記事は学校のなかのことだけしか集められないという反省が子どものなかから出てきたと記されているのである²¹⁾。

それに対し、映画からは新聞部が学外に取材に行き材料を集めていることがわかる。訪れたのは桜田小学校から約4キロメートルのところにある交通博物館である。距離で見れば、学校外で子どもたちの日常生活の範囲内の場所ということになろう。また、取材した豆機関車の試乗は当時における最新の催しだった²²⁾。そのため、新聞部では従来の社会科の学習では実現できなかった学校外の取材、言い換えれば自分たちの身近な生活圏内における時事的な話題の取材が行われていたと考えることができる。

新聞部が社会科の学習で見いだされた課題に発展的に取り組んでいたことについて、映画の別の場面を取り上げてさらに検討したい。



図3 掲示新聞に記事を書くシーン

図3に示したのは、新聞部の活動を紹介する場面で、校庭の一部に設けられた大きな黒板に記事を書いているシーンである（先述のように『桜田カリキュラム』では新聞部が作る3種類の新聞が紹介されていたが、そのうち「掲示新聞」に当たるものと思われる。ただし、映画のナレーションでは「黒板新聞」と呼んでいる）。

ここで書かれている記事について、下部が切れていて確認できないところもあるが、前後から推測して補足したうえで全文を書き出すとつぎようになる。

びっくりニュース

<かたつむりのお化け>

アメリカの西海岸のあちこちに、大きなかたつむりがあらわれて人々をおどろかせています。大きさは、野球のボールくらいもあって、どんどんふえているそうです。太平洋の島にいたのがアメリカ軍の荷物にくっついて、はるかアメリカに渡って来たのだろうといわれています。（下線部は引用者による補足）

『桜田カリキュラム』によれば、1948年度の6年生の社会科における新聞の学習のさいに子どもたちから、「世界の記事をあつめる方法について考える」²³⁾という意見が出されたという。このことについて、『新しいカリキュラムの実践』には、実際の新聞ではどのように海外の記事を集めているのかという関心が生まれ、世界の情報を得る仕組みの学習

につながったと述べられている²⁴⁾。同書の別の部分では具体的に、「新聞」の次の単元「アメリカ」の学習ではアメリカの生活を知るための資料を集める活動を行ったとある²⁵⁾。ここから、桜田小学校では1948年度の段階で社会科の学習の一環として海外の情報を収集する活動を行っていたことがわかる。

図3のシーンの分析から明らかなように、新聞部では海外の話題も取り上げて記事にしていた。そこにおいては桜田小学校の教職員が社会科の学習におけるそれまでの経験の蓄積をもとにして海外の情報を知ることのできる学習材を用意したり、情報を入手する方法を示唆したりするなどの形で新聞部の活動を支援していたことも考えられよう²⁶⁾。先にも述べたように、部の活動に際しては複数の教師による示唆や方向づけが行われていたのである。このように、新聞部が社会科での学習の成果をふまえた発展的な活動の場として位置づき、機能していたことが映画から示唆されるのである。

3.2. 学年・教科を超えた社会科の学びの共有

前節では新聞部の活動と桜田小学校の6年生の社会科での新聞の学習との関連を論じた。一方、新聞部と関わりがあるのは6年生の社会科のみではない。映画では交通博物館を取材する様子が描かれていたが、ここにさらなる関連を見て取ることができる。

雑誌『6・3教室』1949年7月号に、これまでに行ってきた実践の報告というかたちで4年生の社会科・2学期の単元「宿場」の学習の概要が掲載されている。そこでは、この学習が数年来行われてきたものであること、さらには、近年は学習の導入を交通博物館の見学からはじめているということが述べられている²⁷⁾。また、見学は児童に好評だったとも記されている。「宿場」の学習は1949年度も継続し、やはり最初の段階で交通博物館の見学が行われている²⁸⁾。これらのことから、遅くとも1948年以降は、交通博物館は社会科の学習のなかで訪れるとともに子どもたちが関心を示す場所であったことがうかがえる。そのため、映画で言えば、少なくとも

新聞部の4年生と5年生にとって、交通博物館は社会科の学習で既に訪れたことのある身近な場所として記憶されていたことが考えられる。可能性の指摘にとどまるが、社会科の学習での経験が交通博物館への興味関心を高め、新聞部での取材へと結びついたと考えることもできるのである。

また、『桜田カリキュラム』における室井の記述からは、1948年度の6年生は前年度の学習のなかで壁新聞作りを行っていたことがうかがえる²⁹⁾。そのため、映画で描き出された新聞部の活動を、学年を超えて学びを持ち寄り、協働的な活動をとおして共有しながら行っていたと把握することもできる。さらに室井は、新聞作りには、記事の面積を計算して用紙の各部に配置する力、文章を書く力、見出しをつける力、図案やカットを描く力、参考資料を読む力など、社会科を中心としつつ他教科での学びを包含した能力が求められるとも述べている³⁰⁾。このことを鑑みれば、社会科を中心とした多様な学びを共有、継承する場として新聞部が機能していたと考えることができる。

3.3. 新聞をテーマにした学習の可能性の 重層的な探究

前節までの議論を発展させると、新聞部の活動を桜田小学校における社会科の学習の可能性を重層的に探究する試みとして理解することができる。1948年度に6年生の社会科の学習の大きなテーマに新聞を取り上げたことについて、学級担任を務めた室井は、「学校の生活を考えると、新聞を子供たちの生活の中に入入れる事によって、彼等の生活がより望ましい方向に向上し拡充していくであろう事は想像に難くない。また近代社会の通信機関としての新聞のよりよき利用はますます社会生活を民主化し、明朗化するもので、ぜひ子供たちに新聞の学習を要求してよいと考えられる」³¹⁾と説明している。

室井の学習計画と実践の一部は雑誌『教育復興』[1(1)、1948年]に「社会科学学習指導の実際」として掲載された³²⁾。それに対して教育学者の海後宗臣はつぎのように述べてい

る。

「ここに示されている新聞の社会学習は我々の毎日の生活に欠くことのできない新聞を取り扱っているのである。[…] 室井氏の新聞学習への導入は、生徒が学級の壁新聞を編集してこれをつくりあげようとする、自分自らの新聞づくりから出発している。これは本当によいとりつき方と思う。一般にはなかなかこうした子どもの世界の生活活動への着想が出ないものである。[…] 壁新聞を問題として新聞の学習に入ったところが子どもたちは印刷した新聞の発行に関心をもった。これは自然の発展であって面白い」³³⁾。

このように、学習が子どもの興味関心に沿った展開であるとしたうえで「こうして生徒が自ら学校新聞を編集したり印刷したりする実践を通して新聞の機能やその近代的な機構が明かとなり、より実践的な学習に入りうるのはよい方針」³⁴⁾で、「学習が生徒の生活経験から入って自らの生活の中の仕事になって結実し、その間に社会の現実が織りなされて学習されることは最高の学習方式であると考える」³⁵⁾と評価した。

一方で海後は、このあとの授業で新聞から離れて放送(ラジオ)の学習へと展開したことについて、「新聞の学習としては横道に入った感がする。これは別に新しく企画さるべきものであったと考える。学習は一つの明白な目標へ集中されて適切な学習成果へと到達せしめらるべきであろう。この点については学習指導企画全般から再検討さるべきではないか。ついでに放送も片づけてしまっているというようでは、新聞の学習主題も漠然としたものに引きもどすのではないかと見られる」³⁶⁾と指摘した。

すなわち海後は、子どもの生活経験から出発し、自らの学校生活における仕事として継続的に実行されるようになり、社会の現実へと目を向けていく活動を、新聞という題材を通してさらに展開させることに学習の意義を見だし、そのような方向への展開を期待したということができる。

だが、社会科での新聞の学習は海後の指摘とは異なる方向に進んでいった。1949年度

には単元が「新聞とラジオ」として再構成され、通信機関の発達により世界の国々の結びつきが強まっている社会の現実を「我々の生活と、切り離すことの出来ない親しみのある、新聞の発行と、ラジオの放送という、具体的な活動を通して理解させ」ることを目的として³⁷⁾、新聞作りからはじまる活動をラジオ(放送)に関する学習へと展開させる形で授業が進められたのである³⁸⁾。この学習のねらいについて室井は、『新しいカリキュラムの実践』のなかで詳しく述べている。それによれば、6年生の社会科では、「児童自身が解決を迫られていると考えられる問題－それは或る意味では児童の好むと好まざるとにかかわらず解決せねばならぬ社会の要求である－を児童の興味と関心とに依って学習を展開し解決して、六年生らしい生活の態度能力を身につさせねばならない」³⁹⁾。そして、「新聞とラジオ」の単元における「好むと好まざるとにかかわらず児童が解決を迫られている社会の要求」として、「都会に於ても農村に於ても六年生頃になれば、新聞の読み方や、ラジオの聞き方を身につけること」、「現代のわれわれの生活は新聞やラジオによって改善されていること」、「今後の国家や国際生活に於ては、新聞やラジオが大きな役割を占めること」⁴⁰⁾などをあげた。

そのため、1949年度の6年生の社会科の「新聞」学習においては、新聞やラジオといったメディアを使いこなし、それらメディアと自分たちの生活・社会との関係のあり方およびメディアの将来の役割を総合的に学ぶという方向性が明確に示されたといえることができる。それは、室井が述べているように、「児童の好むと好まざるとにかかわらず解決せねばならぬ社会の要求」を取り入れるという側面も含めての社会科の学習の方向性ととらえることもできるだろう。

一方、本稿でここまで論じてきたように、1949年度から新たに始まった新聞部では、子どもの興味関心からはじまった活動が学校生活における仕事として継続的に実行されるようになり、社会の現実が活動のなかに含みこまれていくという、海後が指摘した方向性で

の学習が展開していたといえることができる。

このように、1949年度に桜田小学校で行われた新聞を主たる題材とした活動は、新聞という一つの題材を継続することによる学習(新聞部の活動)と、新聞やラジオといったメディアを総合的にとらえ、将来の役割を探究することによる学習(6年生の社会科の学習)とが、互いに関連しつつ重層的に展開していたと理解することができるのである。

4. 新聞部の活動と以降の桜田プランとの関連

新聞部の具体的な活動と後の桜田プランとの関連も映画から読み解くことができる。

本論の2章で論じたように、1949年度に新設された新聞部は「生活指導」の枠組みのなかに位置づけられていた。新聞部も含めた「生活指導」は、1951年に桜田小学校を編著者とした『桜田の教育 第一集』では「日常生活課程」という名称のもとに整理された⁴¹⁾。そして、<社会科の単元と比べて生活に密着しているために、切実感を抱いて自主的に行動する><活動に具体性を求め実践性を高める><行動に責任を持たせる><自己反省の性格を育てる>という4つの意義が提示されたうえで⁴²⁾、「日常生活課程は学校教育の中で実に大きな意味を持っているといわなければなりません」⁴³⁾と述べられた。『桜田の教育 第一集』は、1950年度までの取り組みの蓄積をもとに「教育の全体構造の再吟味」⁴⁴⁾を行ってまとめられたものだといえる。そのため、1949年度からはじまった新聞部等の諸活動の取り組みを総括して一般化し、日常生活課程の意義として提示したということになるだろう。

では、桜田小学校における教育活動全体のこのような展開のなかに、新聞部の活動はどのように反映されたのだろうか。映画の具体的な場面から検討したい。

図4は、交通博物館での取材をもとに作られた新聞の1面である。上部に「4日金曜日」という文字が見える。一方、紙面の右側には文化の日に関する記事が確認できる。この映画が制作された1949年の11月4日は金曜日であることから、この新聞は11月4日号だといえることができる。

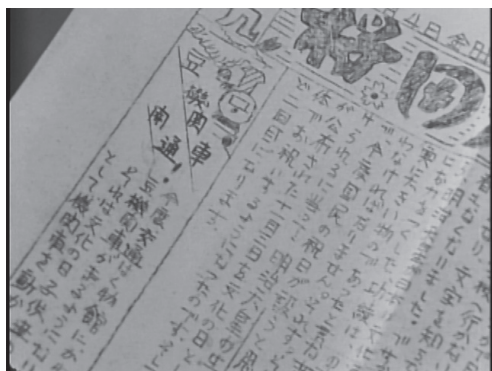


図4 刷り上がった新聞の1面

一方、図5はこの号の記事の割り付けを部員同士で検討しているシーンで、画面の上部に「19号」という文字が確認できる。11月4日号＝19号ということから推測すると、1学期と2学期の最初の週を除いてほぼ週1回の割合で新聞が作成・発行されていたと考えることができる。

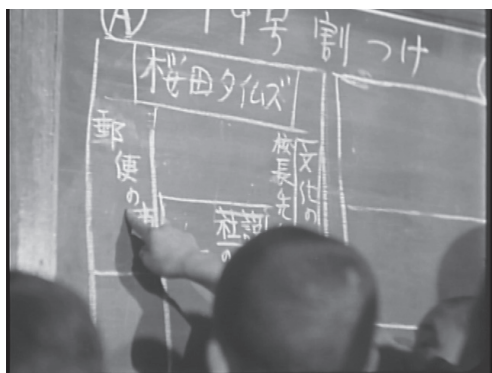


図5 黒板を使って紙面構成・割り付けを考える様子

これらのシーンから推測できる新聞部の活動が、1951年に桜田小学校が自校の日常生活課程の意義としてあげた4点のうち、＜行動に責任を持たせる＞＜活動に具体性を求め実践性を高める＞という点に結びついたと考えることができる。＜行動に責任を持たせる＞という点については、『桜田の教育 第一集』のなかで、「週一回の新聞を出しますと宣言した新聞部がその発行を遅らせることは許されませんでした。他部のひんしゆくをかって一ぺんで信用をおとすからです」⁴⁵⁾と例示し

ながら解説しているように、映画から推測される新聞部の活動の積み重ねが反映されて形作られたものと考えることができる。

また、＜活動に具体性を求め、実践性を高める＞という点についても、「計画は厳に密でないと失敗するという現実を背景としますので、非常に具体性を要求し実践性を高めています」⁴⁶⁾と述べたうえで作業のスケジュールの確立といった行動の例が示されている。そのため、週1回の発行を継続し続けた新聞部の具体的な行動を一般化した面があると考えることができる。さらには、前章で論じたように、新聞部では学外での取材や海外の時事的な話題の収集など学校外における日常生活とも関連した事象を取り上げて活動していた。こうした活動の積み重ねは、日常生活課程の意義のひとつ、＜社会科の単元と比べて生活に密着しているために、切実感を抱いて自主的に行動する＞という点につながっていったと考えることもできよう。

このように、新聞部の活動と桜田小学校が1951年に提示した日常生活課程の意義との間には強い関連が見いだせる。先にも述べたように、『桜田の教育 第一集』では日常生活課程は学校教育の中でも重要なものとして位置づけられ、提示された。1949年から1951年にかけての桜田小学校の教育課程全体—すなわち桜田プラン—の展開における大事な一つが実践にもとづいた日常生活課程の編成と意義の提示だとすれば、そこにおいて新聞部の活動が果たした役割は少なくないといえるのである。

おわりに：本稿の意義と今後の課題

本稿では、映画「こどもグラフ」に描き出された桜田小学校の新聞部の活動を分析した。得られた知見をあらためて整理するとつぎのようになる。

- 1) 新聞部の活動は、社会科の学習と関連して行われていた。社会科を中心とした教科の学習の成果を学年を超えて共有、継承する面があった一方、社会科の授業では困難な学習を展開させる場ともなっていた。桜田小学校では、社会科での学習と

新聞部の活動という2つを連動して実施することで新聞をテーマにした学習の可能性が重層的に探究されていたといえる。

- 2) 新聞部の活動と桜田小学校が1951年に提示した「日常生活課程」の意義との間には関連があった。桜田小学校の教育課程全体(桜田プラン)の展開における寄与という点においても新聞部の活動の意義が見いだせる。

最後に、これらの知見が示唆する意義と今後の課題について、教科「自由研究」の展開およびコア・カリキュラム運動における日常生活課程の探究という、1940年代末から1950年代初めにかけて生じていた2つの状況との関連から論じたい。

『桜田カリキュラム』によれば、新聞部の活動は、週に2時間設けられていた教科「自由研究」のなかでも実施されていたという⁴⁷⁾。「自由研究」とは1947年学習指導要領で新設された教科で、4年生以上に週2～4時間が配当された。具体的な活動としては、①個人の興味と能力に応じた教科学習の発展、②「児童が学年の区別を去って、同好のものが集まって、教師の指導とともに、上級生の指導もなされ、いっしょになって、その学習を進める」活動としてのクラブ活動、③「児童が学校や学級の全体に対して負っている責任を果たす」ための係活動(当番活動)や委員会活動の3つが示された⁴⁸⁾。

しかし、1951年の学習指導要領改訂において、②、③は特別教育活動(教科外活動)に継続され、①に関する事項は教科の中で解消されうるとの理由で、教科「自由研究」は廃止された⁴⁹⁾。

このような経緯に対して本稿では、桜田小学校においては教科「自由研究」の時間が、社会科を中心とした学習の複数の可能性を探究し展開する場として、そして児童が学年を超えて学びを持ち寄り共有する場として、さらには自分たちが学校の全体に対して負っている責任を果たす場として機能していた可能性を提示した。教科「自由研究」に関する先行研究では、具体的な実践の解明が不十分で

あることや、教科の意義の浸透が不十分だったことなどが指摘されている⁵⁰⁾。そこにおいて本稿の知見は、教科「自由研究」の展開をとらえるための新たな視点を示したといえるだろう。

新聞部の活動は教科「自由研究」の展開としてとらえられる一方、コア・カリキュラム運動における日常生活課程の展開の一部としてとらえることもできる。本稿では、新聞部の活動と桜田小学校における日常生活課程の成立との関連を指摘したが、日常生活課程の確立はコア・カリキュラム運動全体としての課題でもあったためである。

コア・カリキュラム運動における日常生活課程の展開を検討した安井(1989)によれば、1949年から1951年ごろに、自治活動やクラブ活動等を主たる内容とする子どもたちの日常的生活活動を学校教育の全体構造の中に位置づけることが重要になったという⁵¹⁾。しかし、それらの活動は1951年の学習指導要領改訂において、先述したように教科「自由研究」の廃止にともない教科外の特別教育活動として制度的に位置づけられ、子どもたちの日常的生活とはかけ離れた、形式的にあつらえられたものへと質的に変容したという。安井はここにコア・カリキュラム運動の展開の限界を見るとともに、現在の教科外活動問題の原点があると指摘する。では、桜田小学校が提示した日常生活課程のあり方は、コア・カリキュラム運動全体の展開においてどのように位置づけられるものなのか。このことについて、あらためて考察する必要があるだろう。

あわせて、史料の限界についても自覚的にならなければならない。1948年に桜田小学校で行われた公開授業および研究協議会に参加した兵庫師範女子付属小学校の清水一郎は、桜田小学校の教師が雑誌に寄せた授業の実践報告と公開授業との間に隔たりがあるとして、「授業と対照して考えると之(雑誌に掲載された実践報告;引用者注)は教育記録というよりも文学的作品といった感じが強い」⁵²⁾と表現している。ここにおいて、本稿で取り上げた映画は、そのメディアの特性ゆえに、

雑誌等に掲載された実践報告よりも一層、「作品」的な側面が強くあらわれているかもしれない。



図6 交通博物館で機関車に乗る子どもたち

たとえば、図6で示したシーンでは、交通博物館に取材に訪れた桜田小学校の3人は撮影者（カメラ）からよく見える側に前後に並んで乗っているうえ、他の子どもとは異なり座席の縁にひじをかけている。そのため、3人がどこにいるか一目でわかる画面構成になっている。ここに彼ら3人を主役として撮影するための作為、すなわち映画の作り手による演出の介在を見て取ることもできよう。「はくらのしんぶん」は、作り手によって桜田小学校の活動の一部が意図的に切り取られ、強調や省略を伴って構成された作品であり、それゆえに本稿で得られた知見の妥当性もより精緻に検討しなければならないものなのである。

新聞部の活動の全体像を明らかにし、教科「自由研究」の展開やコア・カリキュラム運動における日常生活課程の展開との関連において活動の歴史的意義を考察し現在における示唆を得るべく、さらなる史料の発掘と分析を行うことを今後の要諦としたい。

注

1) 「児童は身ぢかな見なれたことを基にして新しいことを学びとって行くものである。また学習が十分な効果をあげるには、児童が積極的にみずからこれを学ぶのでなければならない」〔学習指導要領・

一般編（試案）第1章〕、1947年。以下、各年度版の学習指導要領からの引用および参照はすべて国立教育政策研究所のウェブサイト内にある「学習指導要領データベース」(<https://www.nier.go.jp/guideline/>) から行った（2020年7月9日閲覧）。

「出発点となるのは、児童の現実の生活であり、またのびて行くのは児童みずからでなくてはならないということである。〔…〕そこでわれわれは児童の現実の生活を知り、その動き方を知って、教育の出発点やその方法をこれに即して考えて行かなくてはならないのである」〔学習指導要領・一般編（試案）第2章〕、1947年〕。

2) 「もちろん教育に一定の目標があることは事実である。また一つの骨組みに従って行くことを要求されていることも事実である。しかしそういう目標に達するためには、その骨組みに従いながらも、その地域の社会の特性や、学校の施設の実情やさらに児童の特性に応じて、それぞれの現場でそれらの事情にぴったりの内容を考え、その方法を工夫してこそよく行くのであって、ただあてがわれた型のとおりやるのでは、かえって目的を達するに遠くなるのである」〔学習指導要領・一般編（試案）序文〕、1947年〕。「この書は、学習の指導について述べるのが目的であるが、これまでの教師用書のように、一つの動かすことのできない道をきめて、それを示そうとするような目的でつくられたものではない。新しく児童の要求と社会の要求とに応じて生まれた教科課程をどんなふうにして生かして行くかを教師自身が自分で研究して行く手びきとして書かれたものである」（同前）。

3) 『全国優良小学校に於ける最新カリキュラムの実践』（日本学芸編集部編、学芸社、1949年）と題した書籍のなかにも桜田小学校の教育計画が掲載されている（113-128頁）。

- 4) たとえば、平田嘉三編『初期社会科実践史研究』（教育出版センター、1986年）では、桜田小学校の取り組みを「極めて著名なカリキュラム」（51頁）の一つと位置づけているし、小原友行『初期社会科授業論の展開』（風間書房、1998年）では、「当時全国の教師に大きな影響を与えた教育実践」（11頁）を分析するという主旨のもとで桜田小学校を取り上げている（97-113頁）。
- 5) 船山謙次『続戦後日本教育論争史－戦後教育思想の展望－』（東洋館出版社、1960年）では、コア・カリキュラム運動とそれに対する批判の展開に一章を割いて詳述している。
- 6) 教育学者の矢川徳光が自著『新教育への批判』（刀江書院、1950年）で用いたのが初出とされる。同書が再録された『矢川徳光教育著作集3』（1973年、青木書店）の140-141頁に該当の記述を確認できる。
- 7) 金馬国晴「『はいまわらない』経験主義はありえたか－コア・カリキュラムの全体構造における〈单元〉と知識・技能の関係を手がかりに－」『教育方法学研究』29、2003年、73頁。
- 8) 木全清博「北海道における戦後初期社会科教育史：コア・カリキュラム運動を中心に」『教授学の探究』2、1984年、175頁。
- 9) 同前、176頁。また、前掲の平田嘉三編『初期社会科実践史研究』でも「今日、初期社会科実践に関する資料の散逸ははなはだしく、歴史的に価値ある資料として保存されているものは、ごくわずかにすぎません」（2頁）と指摘している。
- 10) 金馬国晴・安井一郎「解題 戦後初期コア・カリキュラムの特徴と本資料集の意義」、金馬国晴・安井一郎編『戦後初期コア・カリキュラム研究資料集＜東日本編＞解題・資料一覧』クロスカルチャー出版、2018年、1頁。
- 11) 寺本潔「戦後最初の社会科地域副読本と思われる『わたくしたちの港区』の内容と価値」『論叢（玉川大学教育学部紀要）』2011年、37-46頁。
- 12) 1940年に大手新聞社等のニュース映画部門が統合して誕生した社団法人日本ニュース映画社を前身としている。戦前には映画館で公開される「日本ニュース」を、戦後は記録映画や教育映画の制作を行った。
- 13) 文中および表中の時間は映画冒頭からの経過時間で、筆者が映像を確認しながら計測したものである。
- 14) 東京都教育庁学務部学務課編『東京都学校名簿（昭和25年版）』愛の運動本部出版部、128-201頁。
- 15) 古川正義・室井光義『桜田カリキュラム』学芸図書、1949年。
- 16) 同前、151頁。この前頁に掲載されている昭和23年度の教育活動の全体構造を表した図には新聞部およびそれに該当すると考えられる活動は存在していない。
- 17) 同前、142頁。
- 18) 同前。
- 19) 同前、75-76頁。
- 20) 同前、116-119頁。
- 21) 桜田小学校『新しいカリキュラムの実践』明治図書、1949年、199-200頁。この記述が1948年度の実践のものだという明確な記述はない。しかし、同書の発行は1949年4月であり、新年度の実践がはじまっていないことから1948年度の実践をもとにした記述であると推測できる。
- 22) 豆機関車の開通について、交通博物館『50年史』（交通博物館、1972年）には、1949年10月14日に小学生以下の児童を試乗させ、その後常置したと書かれている（63頁）。
- 23) 『桜田カリキュラム』、75頁。
- 24) 『新しいカリキュラムの実践』、199-200頁。
- 25) 同前、77頁。
- 26) たとえば、世界の主要な雑誌等の記事を紹介する雑誌『リーダーズダイジェスト』の日本語版の1949年12月号には掲示新聞に書かれていることと同内容の記事が掲載されている（アルバート R. ミード「暴威を振う巨大なカタツムリ」『リーダーズダイジェスト』1949年12月号、

- 8-10 頁)。また、朝日新聞 1949 年 11 月 20 日付朝刊の 2 面に掲載された同誌の広告にも、「カタツムリがアメリカでも話題になり一部では害虫として恐怖を来している。そのためサンフランシスコとサンピドロでは太平洋方面から入る回収戦争機材に嚴重な消毒を実施している。アフリカ種の巨大なカタツムリを戦争中日本軍が太平洋諸島に食用として飼育を奨励したのがどんどん繁殖して北米にまで侵入してえらいことになっている」という記事が十二月号のリーダーズダイジェストにのっている」と書かれている。このような新聞や雑誌等から記事の題材を探していた可能性が示唆される。
- 27) 桜田小学校「経験カリキュラムによる一つの実験」『6・3 教室』3 (7)、1949 年、32-36 頁。
 - 28) 『桜田カリキュラム』によれば、1949 年度の 4 年生の社会科は 3 つの大きな単元で構成された。そのうちの 2 番目が「宿場」である。「宿場」の導入の活動が「夏休み中の旅行についての話し合い」、「休み中における諸経験の整理」(109 頁)であることから、同単元の学習が 2 学期の冒頭から始まったことが推察できる。交通博物館(同書では「鉄道博物館」と表記)の見学は、夏休み中のできごとの話し合いなどの直後に行われた。
 - 29) 『桜田カリキュラム』227 頁。
 - 30) 同前、203-204 頁。
 - 31) 同前、202 頁。
 - 32) 『教育復興』1 (1)、1948 年、14-24 頁。室井が寄せた「社会科学学習指導の実際」(14-16 頁)と、実際の授業場面を書き起こした「録音」(17-24 頁)から成る。
 - 33) 海後宗臣「壁新聞から新聞の社会学習へ」『教育復興』1 (1) 1948 年、26 頁。
 - 34) 同前、26-27 頁。
 - 35) 同前、27 頁。
 - 36) 同前。
 - 37) 『桜田カリキュラム』116 頁。
 - 38) 同前、116-119 頁。
 - 39) 『新しいカリキュラムの実践』、182 頁。
 - 40) 同前、184 頁。
 - 41) 桜田小学校の教師、樋口澄雄は 1949 年の段階で新聞部を含めた各部の活動や自治活動、行事等をまとめて日常生活課程と位置づけて論じていた(樋口澄雄「日常生活課程の立案と運営」『カリキュラム』(9)、1949 年、9-11 頁)。また、『桜田の教育 第一集』のなかにも、「私たちの学校は、昭和二十四年の四月からはっきりと日常生活課程をもうけて実践してきた」〔桜田小学校編著『桜田の教育 第一集』私家版、1951 年、5 頁。引用は、金馬国晴・安井一郎編『戦後初期コア・カリキュラム研究資料集<東日本編>第 2 巻』(クロスカルチャー出版、2018 年)による。以下同じ〕と述べている箇所がある。そのため、桜田小学校では「生活指導」と「日常生活課程」の語を併用しながら取り組みを行い、最終的に「日常生活課程」に統一されていった可能性が示唆される。
 - 42) 『桜田の教育 第一集』6-7 頁。
 - 43) 同前、7 頁。
 - 44) 同前、5 頁。
 - 45) 同前、7 頁。
 - 46) 同前、6 頁。
 - 47) 『桜田カリキュラム』には、「一週二時間の自由研究は、この奉仕活動の計画・反省の機会に当て」(142 頁)との記述がある。
 - 48) 「学習指導要領一般編(試案)第 3 章教科課程」、1947 年。
 - 49) 「自由研究として強調された個人の興味と能力に応じた自由な学習は、各教科の学習指導法の進歩とともにかなり今まで各教科の学習の時間内にその目的を果すことができるようになったし、またそのようにすることが教育的に健全な考え方であるといえる。そうだとすれば、このために特別な時間を設ける必要はなくなる」〔「学習指導要領一般編(試案)Ⅱ教育課程」、1951 年〕。
 - 50) 奥本繁「特別教育活動における『自由研究』再考」『國學院短期大学紀要』16、1998 年、5-47 頁；青木靖「戦後『教科・自由

研究』の教育実践に関する一考察：栃木
師範国民学校と附属宝木小の実践を中心
として」『学校教育研究』20、90-101 頁；
山本隆大・野田敦敬「昭和 22 年度学習
指導要領（試案）教科『自由研究』から
見る探究活動の課題について」、『愛知教
育大学研究報告 教育科学編』61、2012 年、
1-8 頁、など。

- 51) 安井一郎「戦後初期における日常生活課
程論の理論的基底に関する一考察－久保
田浩の『生活づくり』論を中心として－」
『教育方法学研究』15、1989 年、39-40 頁。
52) 清水一郎「学校めぐり 桜田小学校を参
観する」『カリキュラム』(3)、1949 年、
31 頁。

* 引用文中の旧字体・旧仮名遣いは新字体・
現代仮名遣いにあらためた。

* 「こどもグラフ」内の映像は、株式会社東
宝ステラ 日映アーカイブより利用許諾を
受けて引用した。

* 本稿は第 42 回日本比較文化学会全国大会・
2020 年度国際学術大会での発表にもとづい
たものであり、JSPS 科研費 20K02439 の助
成を受けた研究成果の一部である。